

[冬季直売用切花における低コスト・安定生産技術の確立]  
ランンキュラス「エレガンスディーブピンク」に対する球根冷蔵処理効果

田旗裕也・岡澤立夫  
(園芸技術科)

---

【要 約】ランンキュラス「エレガンスディーブピンク」に対する球根冷蔵処理によって、2月中旬からの収穫が可能であり、株あたり採花本数が増加する。切り花長は無処理と同等で、茎径は細くなるが、実販売上には影響が少ない。

---

【目 的】

ランンキュラスは、パステル調の花色と豪華な八重咲き性を備えた品目で、季咲きは卒入学シーズン、栽培管理は比較的低温で可能であることから、都内直売生産者の関心が高い。本試験では、球根冷蔵処理による、早期出荷達成と収量・生育への影響を把握する。

【方 法】

品種「エレガンスディーブピンク（ミヨシ）」を供試した。試験は球根冷蔵処理区と冷蔵無処理の対照区の比較で、球根冷蔵処理は、吸水膨満後の球根に、予冷 10℃ 2 日間、本冷 5℃ 30 日間の湿式冷蔵処理を行ったものを使用した。両区ともに 2011 年 10 月 19 日にピートモス 2 : パーライト 1 : バーミキュライト 1 (体積比) の混合用土を充填した容積 12L のプランターへ定植した。供試株数は、各プランター 3 株植え、各区 27 株を供試した。基肥は緩効性肥料ロング 14-12-14 により N 2 kg/m<sup>3</sup> とし、2 月以降は毎月 IB 化成肥料を追肥した。栽培は、3℃加温 25℃換気のパイプハウスで実施し、4 月 17 日まで毎日の収量、切り花長、茎径等の生育項目を調査した。試験規模は、各区 6 株 3 反復で全株調査とした。

【成果の概要】

1. 株あたり収穫本数が 1 本を越えたのは、対照区で 3 月 7 日だったのに対し、球根冷蔵区は 2 月 21 日で明らかに前進した。開花始以降、両区とも切り花本数は増加したが、4 月下旬までの累積開花本数は、対照区が 1 株あたり 14.6 本だったのに対し、球根冷蔵区は 22.8 本であった (図 1)。
2. 2～3 月の切り花長は、対照区と球根冷蔵区で差がなかった (表 1)。
3. 球根冷蔵処理は、葉身長と着蕾数に影響を及ぼさなかった。主茎節数が減少し、茎径が細くなったが、出荷に影響を及ぼす数値ではなかった (図 2)。
4. まとめ：ランンキュラスに対する球根冷蔵処理は、早期開花と 4 月中旬までの収穫本数増加に有効だったが、本試験の栽培環境では 1 月収穫はできなかった。切り花長への影響が認められなかったことから、都内直売出荷生産に導入性が高い技術である。
5. 留意点：冬季連続収穫のためには、より早期の収穫達成にむけた処理方法や栽培方法の検討が必要である。

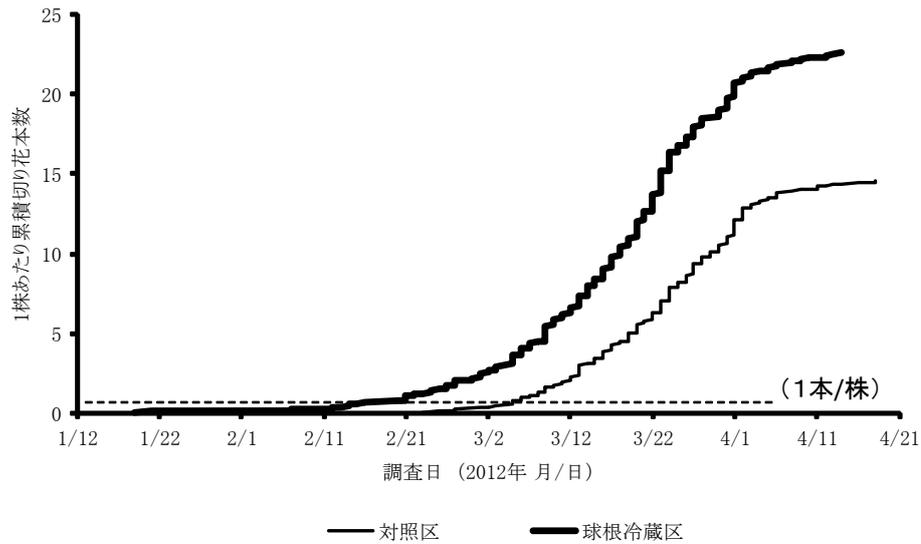


図1 球根冷蔵処理がランキュラス「エレガンスディープピンク」の収穫本数におよぼす影響

表1 月別収穫本数と切り花長への影響

処理区	2012年1月		2月		3月	
	収穫本数 (本/株)	平均切り花長 (cm)	収穫本数 (本/株)	平均切り花長 (cm)	収穫本数 (本/株)	平均切り花長 (cm)
対照区	0.0	-	0.3	31.5	10.8	35.6
球根冷蔵区	0.1	18.5	2.1	31.7	16.3	36.4

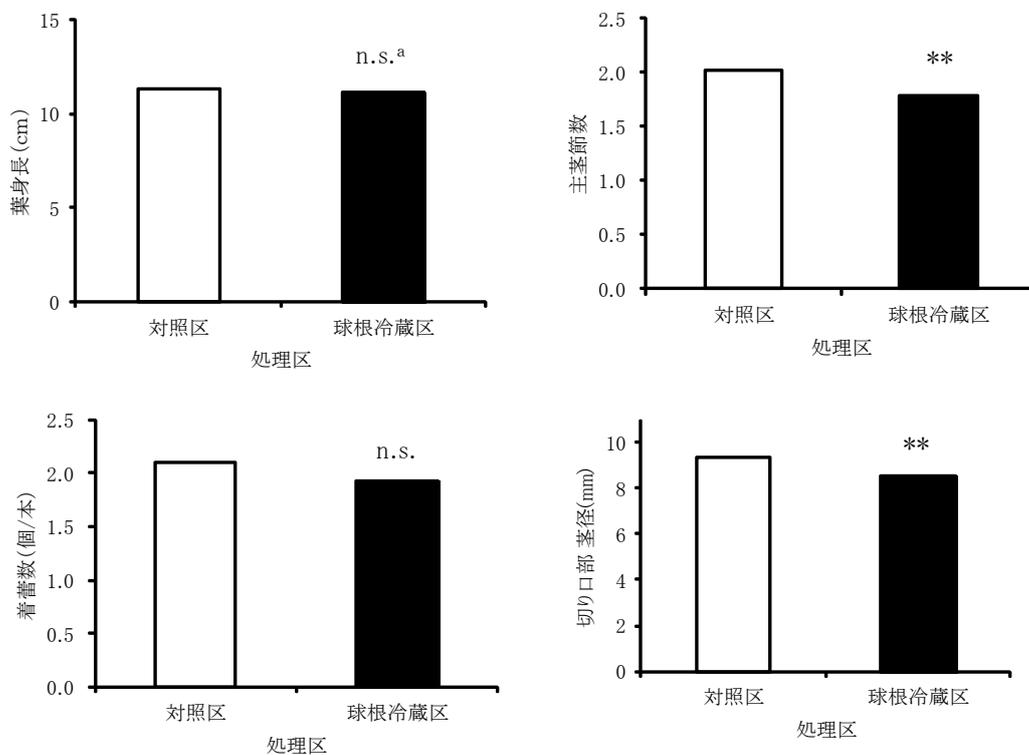


図2 球根冷蔵が葉身長、主茎節数、切り花あたり着蕾数、茎径におよぼす影響

a) t検定により、n.s.は両区間の数値に危険率5%で有意差なし、\*\*は1%で有意差ありを示す。